

Impact of oocyte donation on perinatal outcome in twin pregnancies

双胎の卵子提供妊娠の周産期予後

-双胎の卵子提供妊娠は妊娠高血圧腎症と後産期大量出血のリスクである-

Guilbaud L, Santulli P, Studer E, Gayet V, Goffinet F, Le Ray C. Fertil Steril. 2017 ;107(4):948-53.

近年、生殖補助医療の進歩と普及に伴い、早発閉経や高齢難治性不妊症などの女性が、第三者から卵子の提供を受けて妊娠する、卵子提供妊娠が増えてきている。

卵子提供妊娠は、妊娠高血圧症候群および妊娠高血圧腎症(Preeclampsia:PE)のリスクであるとの報告は多い。本論文では双胎の卵子提供妊娠は、PE に加え後産期大量出血(postpartum hemorrhage: PPH)のリスクであると結論している。

本研究は、2010年1月から2014年12月までに、French tertiary university maternal-fetal medicine center (フランス)で行われた後方視的研究で、双胎の卵子提供妊娠(oocyte donation: OD : n=102)、自己の卵子を用いて体外受精で妊娠した双胎妊婦(in vitro fertilization with autologous oocyte: AO : n=201)、体外受精を用いず妊娠した双胎妊婦(non-in vitro fertilization : non-IVF : n=369)の3群にわけ、周産期転帰を比較検討している。

ODの母体平均年齢は43.1歳であり、AO 34.6歳および non-IVF 32.7歳と比較し有意($P < .001$)に高く、ODでは初産率も有意($P < .001$)に高率であった。分娩週数、早産率、出生体重は3群間で差はなかった。

ODの自然陣痛発来は19.6%であり、AO 41.8%および non-IVF 43.6%と比較し有意($P < .001$)に低く、50.0%が陣痛誘発、30.4%が陣痛発来前の帝王切開であった。また、ODの経膈分娩率は33.3%であり、AO 49.2%および non-IVF 52.6%と比較し有意($P < .001$)に低く、帝王切開率が高率であった。

ODのPE発症率は26.5%であり、AO 7.0%および non-IVF 8.7%と比較し有意($P < .001$)に高率であることに加え、ODのPPH発生率が23.5%であり、AO 12.4%および non-IVF 7.6%と比較し有意($P < .001$)に高率であった。なお、本論文ではPPHの定義の記載はないが、ODの1,000 mL以上の症例ではPPH発生率が7.8%であり、AO 1.5%および non-IVF 2.2%と比較し有意($P < .001$)に高率であったことを示している。また、母体年齢や膜性診断などの交絡因子補正後の多変量解析においても、双胎の卵子提供妊娠はPEおよびPPHのリスク因子であることを示している。

PPH症例のうち、各群の輸血症例は、OD 58.3%、AO 36.0%、non-IVF 31.0%であり、さらに緊急hysterectomyに至った症例は、OD 16.7%、AO 0.0%、non-IVF 3.7%であった事を示している。

筆者らは、PPHの原因について詳細な追究はできていないが、卵子提供妊娠では癒着胎盤が高率に認められるためではないかと考察している。

日本とフランスでは双胎の分娩方法が大きく異なるため、日本でも同様の結果になるかは疑問である。しかし、近年、海外で卵子提供を受け日本で分娩をする女性が増加しているため、日本における単胎、双胎それぞれの卵子提供妊娠とPEおよびPPHの関連についての調査・研究は興味深い課題と思われる。

(2018年6月 文責:評議員・幹事 中林靖)